

タケノ時空間散歩『この家で』語りならべカルタ

字	読み札	解説
あ	あのつく竹野の名産品 赤イカ アカモク 青井石（あおいし）	秋から初冬の竹野漁港のセリに並ぶ巨大な赤イカは壮観。手作業で選別されたアカモク（海藻）はネバネバのスーパーフードです。鳥居、家の土台など各所に使われている青井石は、北前船で栄えた当時から竹野の風土を守って来ました。
い	今坂の峠で見守るお地蔵さま	歩いての峠越しの時代、今坂地蔵さまに「ってきます」「無事で帰って来ました」と挨拶し、学校帰りの子供達はお供物のおやつをいただいていたいました。
う	梅田三角地蔵盆 変装踊りはじまりの地	豊岡よりも賑わっていた商店街があった頃の森本の梅田三角での地蔵盆。常は竹野川沿いに安置されている「日限り地蔵さま」をここにお祭りして、「やちゃ踊り」での変装踊りが生まれました。その後学校に場所を移して大規模に行われていましたが、惜しまれながらも2022年に中止となってしまいました。
え	恵方巻 手づみ岩海苔の 香り豊かに	希少な手摘み・手作りの海苔の恵方巻は、竹野ならではの季節の味です。
お	おばあふところ 山に抱かれあたたかく	竹野町竹野（西町）の、今坂へ向かう辺り。山に守られて海からの冬風が吹かない、おばあさんの懐に抱かれているようなところの地名。河童の娘キヨの捨て身の愛の伝説があります。
か	川イトで とれたて野菜洗う朝	水の豊かな竹野。イト（トにアクセント）は、川や用水路に青井石が敷いてあったり、梯子が掛けられているところです。イトでは、お茶碗や野菜を洗ったり、足踏み洗濯したり、川でとったモクズ蟹を浸けたりしていました。
き	キンキンカンカン キンカンゴオリでメギヤッコ	「キンカンゴオリ」は冬に大流行の遊びでした。凍った地面にうっすらと積もった雪と、その下の土でビー玉くらいの芯を作り、それ転がしながら雪だるまを作る要領でボールくらいの玉を作ります。一晩軒下などに置いていっそう硬く凍らせたら完成。「メギヤッコ」とは「壊し合いっこ」の意味で、玉同士をぶつけ合ったり地面に落としたりして、割れた方が負け。割れた断面は幾つもの層になっています。

く	クリスマス みんなそわそわ ダンスパーティー	毎年のクリスマスに初めは竹野小学校の講堂で、その後は昭和 46 年に開業されたシーサイドホテルにて、青年団主催のダンスパーティーが催されていました。豊かになってきた時代には手作りのワンピースで少しおしゃれをしたり、みんな楽しみにしていたそうです。
け	ケンケンパ ひろひろ まりつき 石なんご	子供たちが遊ぶ姿があちこちにあった頃の遊び名です。小石を集めて遊ぶ「ひろひろ」や、まりつきにはそれぞれ数え歌があります。石なんごはお手玉のこと。数珠玉（イネ科の植物）の実を入れると良い音がしました。
こ	米づくり 八十八もの手をかけて	米という字が「八十八」からできているごとく、それだけの手間をかけて育てるのだそうです。田植えは夏至から 11 日目の半夏生（はんげしょう）、カラスビシャク（サトイモ科の植物。乾燥させた根茎は漢方の半夏）の生える頃までにと言われています。
さ	三八（さんぱち）豪雪 電線に巻いた赤い布	昭和 38 年 2 月にかけての冬は、全国的に甚大な被害をもたらした歴史的な豪雪でした。屋根の雪下ろしでいっそう積もった雪のために 2 階から出入りするほどで、電線に引っ掛からないように、1 日電気を止めて電線に赤い布を巻く作業が行われました。
し	塩工房 薪の匂いと湯気の中の きらめき	丁寧に對話しながらいくつもの工程を経て、生まれるまばゆい塩。800 リットルの竹野の海水から、いくつもの工程を経て 10 キロほどの塩が生まれます。
す	炭俵の縄で縄跳び 瓦のカケラで瓦当て	子供たちは、身近なものをなんでも使って遊ぶのがとても上手。ワラ縄は真ん中を水につけて重くするとよく回るそうです。瓦当てには、かなり難しいものまで色々な技がありました。
せ	セリはな、リズムとスピードが 大事なんや	港によって節回しや用語も違うセリ。竹野港の節回しはそんなにややこしいものではなくスピードも遅めだとのことですが、場を仕切るセリ人はやっぱりカッコいいのです。
そ	そら豆のキンチャクさげて 臨海学校	中竹野地区の子どもたちは、浜地区への臨海学校に行くのが夏の楽しみでした。おかあさんに持たせてもらった、煎ったそら豆を入れた巾着袋。それを腰につけて海遊びをした後に食べる、柔らかくなって海水の塩味がついたそら豆はとってもおいしかったそうです。

た	田久日（たくひ）ノリに 宇日（うひ）ワカメ 海のおくりもの	大判の田久日ノリと岩に広げて干していた宇日ワカメは、ともに希少な特産です。所以は諸説ありますが、地域に伝わる「田久日女に宇日男」という言い回しもあります。
ち	チャンバラごっこ 誰かが泣いたらハイやめてー	大きい子が小さい子たちも引き連れて、みんなで遊んだものでした。小さい子のために特別ルールをつくったり、誰もが楽しく一緒に遊べる工夫もありました。
つ	通過する電車は左に 前は切浜の海	西町から今坂を越えると、左手に行く単線列車が山沿いに曲がって行きます。そして目の前に開けるは切浜の海。
て	でーこんと小芋をぐつぐつ 冬が来る	「でーこん」とは大根のこと。冬のごちそうです。
と	どんどの火 お鏡焼いて おぜんざい	「どんど」は小正月にお正月飾りなどを持ち寄って燃やして、無病息災、安全祈願、五穀豊穰などを願う行事です。下げた鏡餅を焼いてぜんざいに入れたり、字がうまくなりますようにと、子供達の書き初めを燃やす地域もあります。
な	長持唄で嫁さん行列 あんたのタンスかついだで	長持唄で送って、歩いてのお嫁入りでした。提灯（またはアンチヨ：障子紙で四角く囲んだ燭台）を持つ人、箆笥（たんす）や長持（ながもち：横に長い大きい収納箱）をかつぐ人で長い行列だったそうです。
に	日直の名残る黒板 木造校舎 あぁ母校	2015年に閉校となった森本中学校。書棚の裏にあった黒板には、昔々のある日の日直二人の名前が残っていました。長い廊下ではビー玉遊びに熱中していたそうです。母校が失くなるというのは寂しいことです。
ぬ	ぬばたまの夜 ペインズグレーの入江の集落	切り立つ崖に挟まれた、入江の谷沿いに細長くある田久日（たくひ）の集落。1965年の但馬海岸道路の開通以前は、船で行くか、険しい山道を通してしか訪れることができませんでした。「ぬばたまの」は「黒・夜・夢」などにかかる枕詞。ペインズグレーは、青味がかった濃いグレー。

ね	練り歩く子ども神輿 にがけー秋祭り	「にがけー（にがこい）」とは、賑やかなこと。浜地区では各地区の子ども神輿が町内を巡行しながら踊りを披露し、各戸はお包みを渡します。見習いの歳の子は、はっぴの色が違います。
の	ノリツケホーセ 明神さんの松の木にフクロウ	鳴き声がノリツケホーセとかノリツケホーソと聞こえるので、明日は晴れるからノリつけて洗濯物を干せと教えてくれていたのだとか。
は	機（はた）織りの音 シュットン みーんなしとんたったなあ	床瀬や切浜で、機織りは冬仕事だったり日常だったと聞きました。幾つもの工程を経て作った麻糸では蚊帳や布巾をつくり、蚕から糸を引いての絹織物は京都へ染めに出して、着物に仕立てたりしていました。「御又（おんまた）」の地名は機織り職人が住んでいたことで「織機（おりはた）」と呼ばれたことが由来だそうです。やさしい響きの「～しとんたった」「なあ」は、竹野の言葉です。
ひ	ひなべ食べ行こーや 休み時間の桑畑	桑の実のことを山の方では“ひなべ”、浜の方では“ひなび”と呼んでいたそうです。学校裏の桑畑で、休み時間に競って食べていたそうです。蚕を飼っている家も多く、餌用の桑の木もたくさんありました。
ふ	船小屋の変わらぬ風景脈々と	浜須井の東の入江、田久日や宇日に船小屋の風景が見られます。竹野川の川港に並ぶ漁師小屋には、仲間で建てた集いの場もあります。
へ	「へえ～！」は こんにちはの代わりだわな	よその家を訪ねての戸口からや、お店に入った時の呼びかけに「へえ～」とっていました。耳に楽しい竹野言葉です。
ほ	檜（ほそき）神社の祭礼 清（すが）しさに沁みいる祝詞	集落の山に鎮座する檜神社。美しい参道は少々の山道ですが、10月の例祭には檜（はじかみ）の氏子中が集まります。以前は屋台も並び、相撲神事も行われていました。立派な彫物の拝殿の中にいらっしゃる、室町時代のものとされる、希少かつ愛らしい木彫狛犬さん一対は、下宮社の前にある推定樹齢500年の「おまき桜」とともに豊岡市指定文化財です。
ま	満願寺の石段 田んぼまで一直線の竹スキー	大雪でバスが止まると、石段の上から道を越えた田んぼまでが子どもたちの絶好のスキー場でした。バスが来て開いた穴にまた雪を盛っては叱られていました。手作りの竹製スキーは、直滑降しかできなかったそうです。

み	三原の木地師 ろくろとカンナ 木の香り	冬の仕事である木地挽き（きじひき）。お盆やお碗、棗（なつめ）などの茶道具を作ります。名人の匏（かな）入れは、手先ではなく腰で具合をとります。
む	紫水晶 土器のかけら 少年時代の宝物	但馬海岸道路の工事で破碎した山では紫水晶の原石が、おばあのおふところ辺りでは古代の土器のかけらが数多くあり、遊びの一環としてごく当たり前に採取していたそうです。
め	目に沁みる田んぼの緑 竹野の夏	米づくりをやめてしまった集落もありますが、稲田は各地に見られます。平野に広がる田、山間の棚田、川沿いの集落と田園、どれも美しい竹野の風景です。
も	モーツァルトと発酵のつぶやき 醤油麴（しょうゆこうじ）の熟成	モーツァルトを聴きながら、プツプツと小さな発酵の音をたてて、一年間大事に見守られて熟成する醤油麴（しょうゆこうじ）。醤油を使って醤油を仕込む希少な二段仕込みの製法は、北前船(きたまえぶね)の寄港地づたいに伝わったのかもしれない。
や	ヤキータの炎 先人の技がつくる町なみ	三角に組んだ杉板を火を起こした一斗缶の上に立てると、筒の中を走って炎が吹き上がります。先人の知恵と巧の技の賜物の焼杉板は、厳しい気候から暮らしを守り、美しい町並みをつくっています。
み	井戸端の地蔵盆 だんごがあっても たまりがニャアニャア	浜地区の地蔵盆は7つの井戸に子供たちが集って歌っていました。「たまりがニャアニャア」とは、「お金はない、ない」の意味で、募った寄付は翌年の行事のためのものでした。
ゆ	雪道のアラツアラツ 郵便配達の追憶	「大雪だろうと矢が降ろうと集めて配る。それが配達員なのです。」と綴られた昭和10年に郵便局に就職した頃の日々が万年青に掲載されています。「アラツ」とは誰も通っていない新雪の上を歩くことです。
ゑ	恵日・金原 竹野の秘境の里の秋	大雪の年には孤立して、自衛隊のヘリコプターが物資を運んだこともある地域。清らかな水の流れる美しい山里の風景は今も変わらずそこにあります。
よ	夜を彩る なごみのあかりの ロジナリエ	海岸に打ち寄せられた流木と和紙で作る、竹野のあちこちで目にする手作りの灯り。7月30日の「なごみてえロジナリエ」では町内に約600個も灯されます。
ら	落日の川湊 家のあかりゆらめいて	以前は早朝から漁船の出入りやセリで賑やかだった川港。夕方の西空と川面にゆらめく家々のあかりは、美しくやさしい光景です。

り	リヤカー押して 一番列車で行商へ	竹野漁港の早朝は、セリのはじまるサイレンの音、魚を入れたブリキ缶の音でたいそう賑やかでした。一番列車には魚の行商専用の車両もあったそうです。駅へ向かう母親のリヤカーを子供たちが一緒に押して、積荷を手伝うのも毎朝の風景でした。
る	瑠璃色と弁柄色のイソヒヨドリ さえずり美しく	磯や岩場に多く生息するイソヒヨドリのオスは、頭から背中が紫がかった青で、胸は赤茶色。雄雌ともにさえずりが美しい鳥です。人懐っこいのか、人が近くにいてもあまり気にならない様子で歌い続けていることもよくあります。
れ	蓮華の赤紫のじゅうたん 寝転んだ空にヒバリ	気持ちよく晴れた春の日、学校帰りの寄り道の光景です。帰ると家の用事が待っている子どもたちの、息抜きの一と時でした。
る	路地の町 迷路の先に望む海	竹野の浜地区に焼き杉板の町なみがあります。海風を防ぐための入り組んだ路地は、江戸時代末期から変わらぬものだそうです。迷いながら歩き、角を曲がると、細い路の先には青い海。竹野ならではの心惹かれる風景の一つです。
わ	ワンコって ふねのねぐらのことなんよ	竹野川の川湊は“ワンコ”（湾港）と呼ばれています。「ワンコに遊びに行ってくるわー」と、子どもたちの遊び場でもありました。
を	惜しまれつ消えた祭りの 思い出尽きず	昭和の観光ブームによって民宿業が忙しくなった時代や、近年の少子高齢化などによって、途絶えた竹野各地の祭りや行事は数多くあります。生き生きと語られる当時の思い出を聞くにつれても、暮らしの中に受け継がれる祭りがあることの、かけがえのなさをしみじみと感じます。その一方、新たに現代の祭りのカタチも生まれてきている竹野です。
ん	「ん」で結ぶ 三原の木彫りの狛犬さん	年代作者は不明ですが、愛嬌あふれる木彫の狛犬さん一対が、三原の産霊（うぶすな）神社（天満宮）に鎮座しています。祭礼日には集落の人々が多く詣で、餅まきも行われます。いつもは静寂の中におんなる狛犬さん「おーっとろしゃ、なんちゅーにがけーことだわ」と言いつつも楽しみにしとんなることでしょう。竹野言葉で締めてみました。